

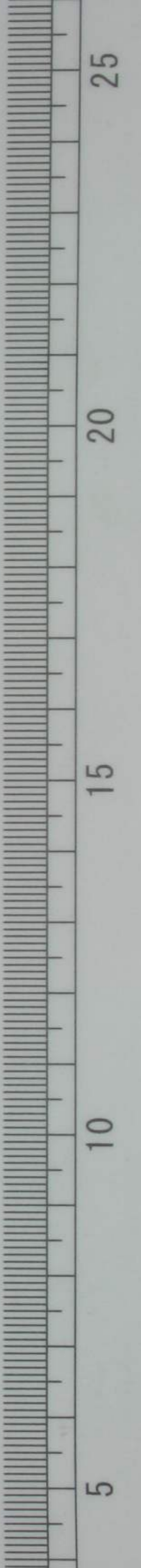
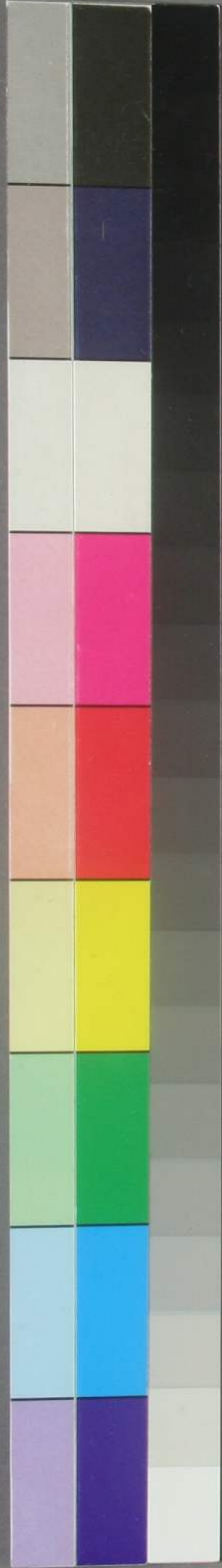
歌集

赤光

齋藤茂吉著



東京東雲堂出版
(三版)



歌集
赤
光

齋藤茂吉著



歌集

光 赤

著 吉 茂 藤 齋

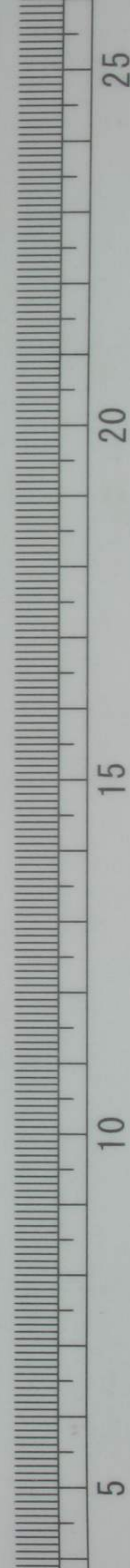
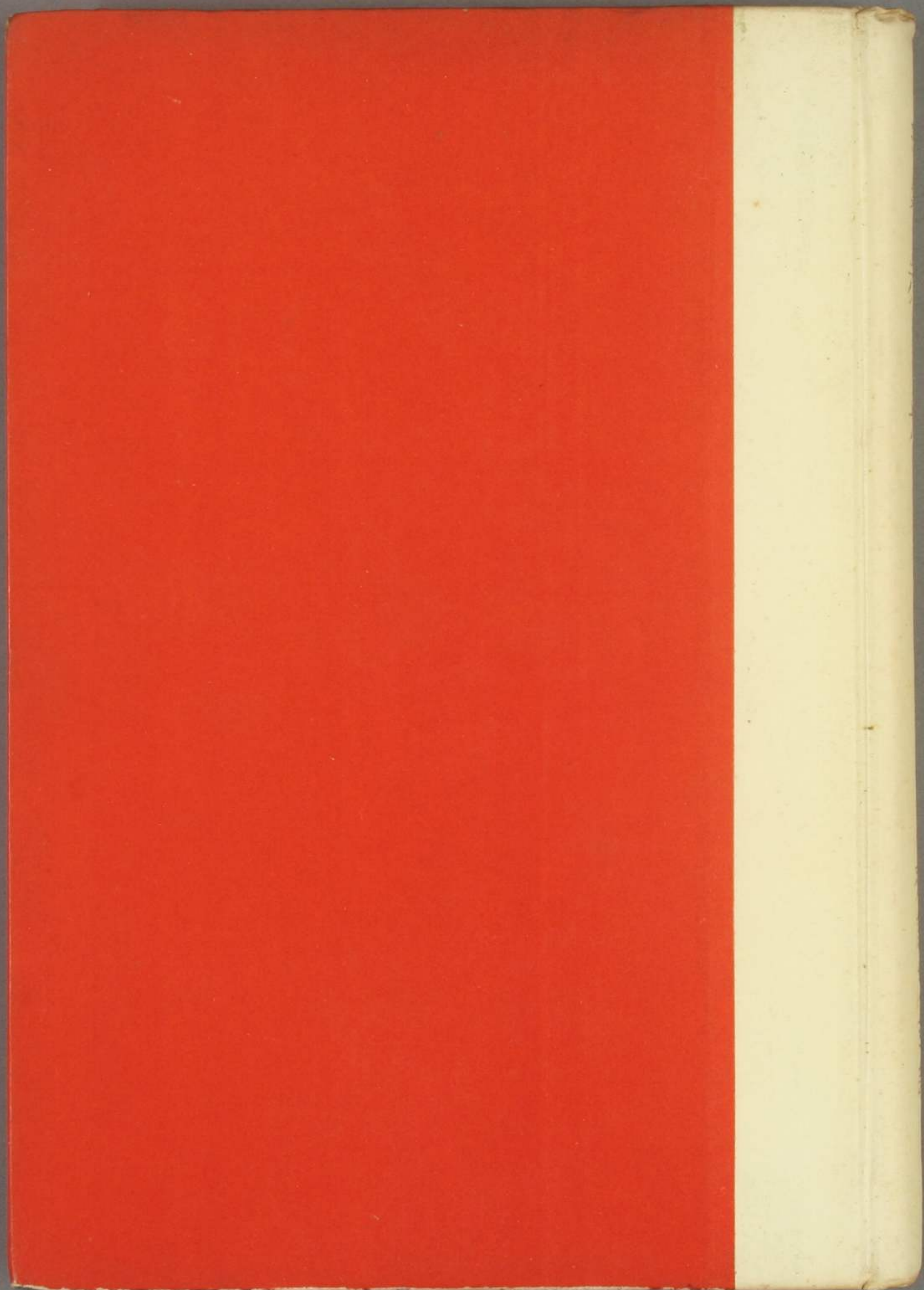
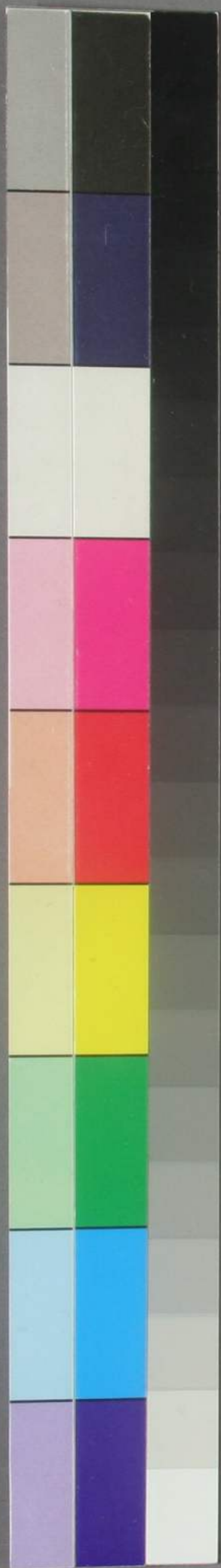


版出 堂雲東 京東
(版 三)

歌集
赤
光

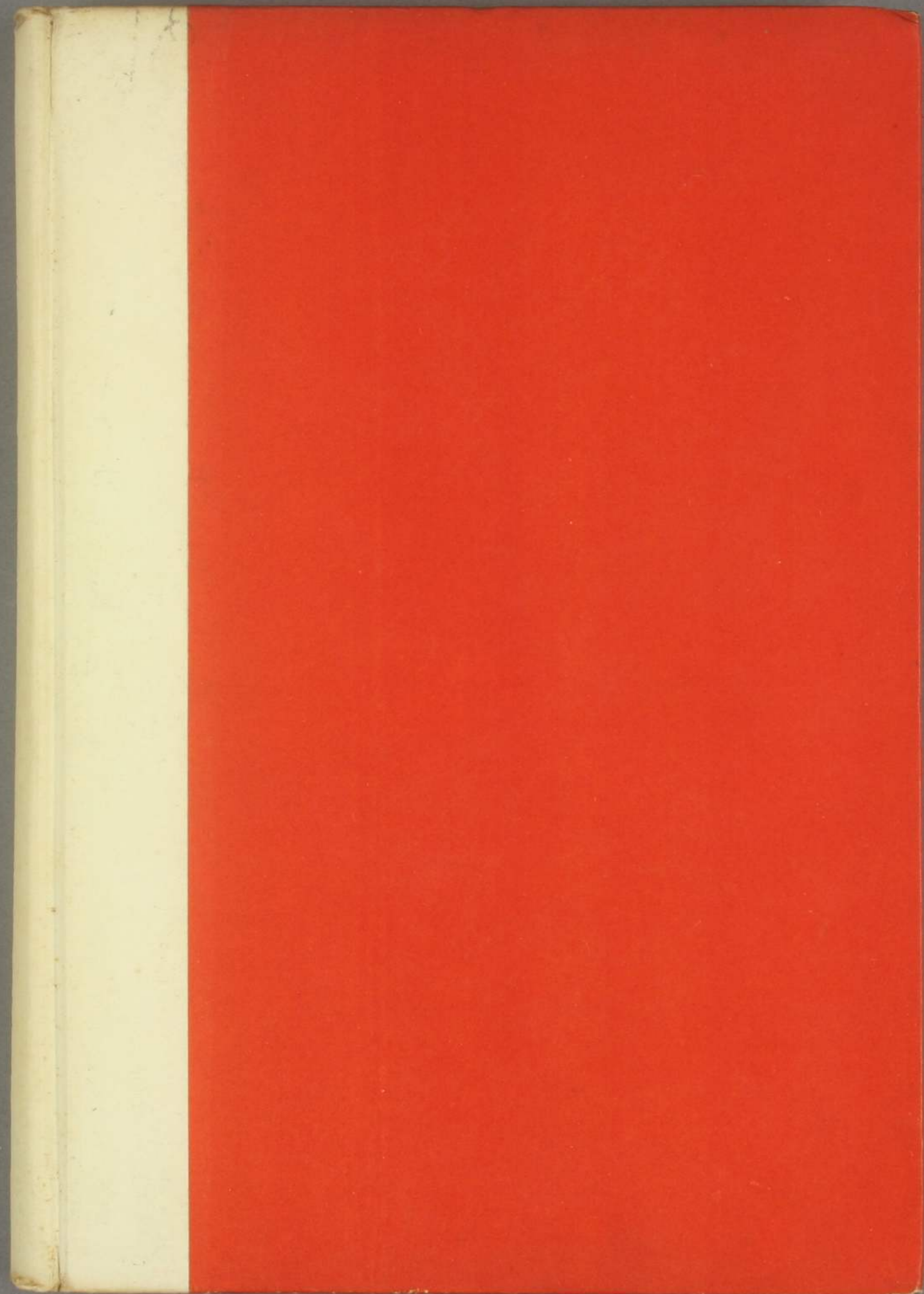
齋藤茂吉著

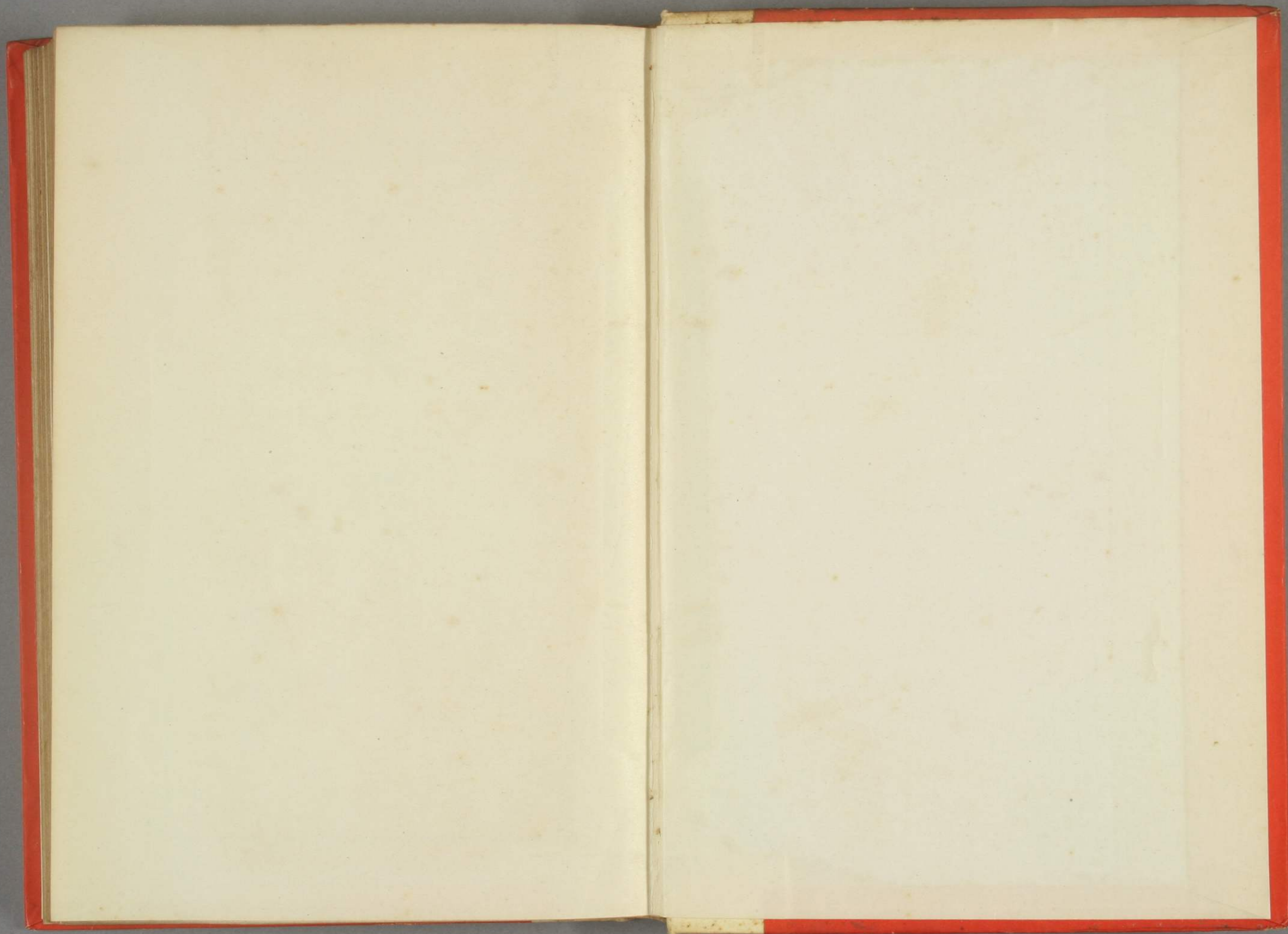




歌集
赤
光

齋藤茂吉著





赤
光

齋藤茂吉著

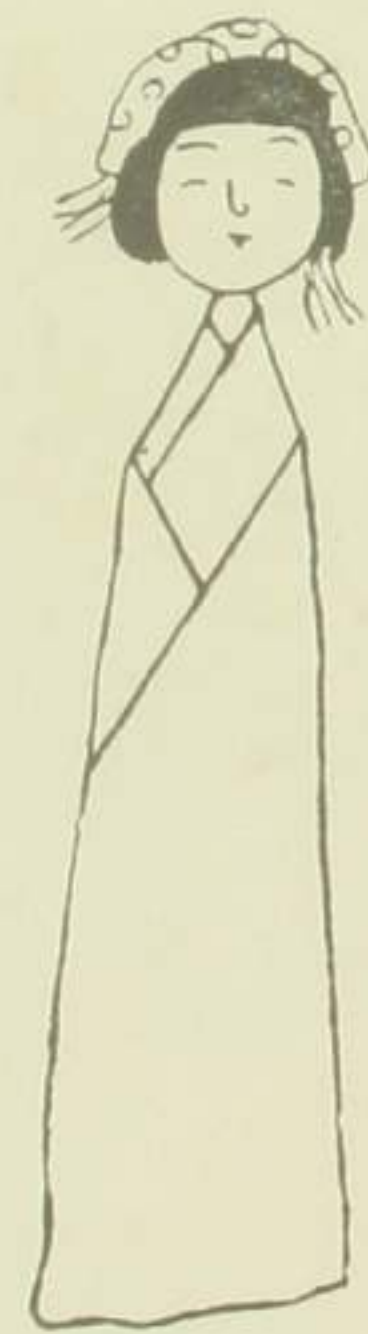


(アララギ叢書第二編)

東京 東雲堂發行

赤
光

齋藤茂吉著



(アララギ叢書第二編)

東京 東雲堂發行





大正二年
(七月迄)



1 悲報來

ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたる
わが道くらし

3
ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢を殺す
わが道くらし

すべなきか螢をころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

氷室より氷をいだす幾人はわが走る時ものを
云はざりしかも

氷きるをこの口のたばこの火赤かりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ぬかなと歎かひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦と赤彦が妻吾に寝よと蚤とり粉を呉れに
けらすや

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに見んと思入や

あかあかと朝焼けにけりひんがじの山竝の天朝焼けにけり

七月三十日信濃上諏訪に滞在し、一湯浴びて寝ようき湯壺に浸つてゐた時、左千夫先生死んだといふ電報を受取つた。予は直ちに高木なる島木赤彦宅へ走る。夜は十二時を過ぎてゐた。

2 屋上の石

あしびきの山の峽をゆくみづのをりをり白くたぎちけるかも

しら玉の憂のをんな戀ひたづね幾やま越えて来りけらしも

鳳仙花城あそに散り散りたまる夕かたまけて
忍び逢ひたれ

天そそる山のまほらに夕よごむ光りのなかに
抱きけるかも

屋上の石は冷めたしみすすかる信濃のくにに
我は來にけり

屋根の上に尻尾動かす鳥來りしばらく居つつ
去りにけるかも

屋根踏みて居ればかなしもすぐ下の店に卵を
數へゐる見ゆ

屋根にゐて微けき憂湧きにけり目したの街の
なりはひの見ゆ (七月作)

3 七月二十三日

めんめん 雞こら砂さあび居いたれひつそりとか剃そ刀とう研ぎ人は
過あぎ行いきにけり

夏なつ休やす日ひわれももらひて十日じゅうにちまり汗あせをながして
なまけてゐたり

たたかひは上海しやんはいに起おり居いたりけり鳳ほう仙せん花か紅こうく
散ちりゐたりけり

十日じゅうにちなまけけふ來きて見みれば受う持ぢの狂きやう人にんひと
死しに行いきて居いし

鳳ほう仙せん花かかたまりて散ちるひるさがりつくづくそ
われ歸かへりけるかも (七月作)

4 麥 奴

しみじみと汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦に
さみだれは降り

雨空に煙上りて久しかりこれやこの日の午時
ちかみかも

飯かしぐ煙ならむと鉛筆の秀を研ぎて居て煙
を見るも

病監の窓の下びに紫陽花が咲き折をり風は吹
き行きにけり

ひた赤し煉瓦の扉はひた赤し女刺しし男に物
いひ居れば

監房より今しがた來し囚人はわがまへにゐて
やや笑めるかも

卷尺を囚人のあたまに當て居りて風吹き來し
に外面を見たり

ほほけたる囚人の眼のやや光り女を云ふかも
刺しし女を

相群れてべにがら色の囚人は往きにけるかも
入り日赤けば

まはりみち畑にのぼればくろぐろと麥奴は棄
てられにけり

光もて囚人の瞳てらしたりこの囚人を觀ざる
べからず

けふの日は何も答へず板の上に瞳を落すこの
男はや

紺いろの囚人の群笠かむり草薙るゆゑに光る
その鎌

監獄に通ひ來しより幾日經し蝸啼きたり二つ
啼きたり

よごれたる門札おきて急ぎたれ八尺入りつ日
ゆららに紅し

微毒のひそみ流るる血液を彼の男より採りて
持ちたり (七月作)

殺人未遂被告某の精神状態鑑定を命ぜられて某監獄に通
ひ居たる時折にふれて詠みすてたるものなり。

5 みなづき嵐

どんよりと空は曇りて居りたれば二たび空を
見ざりけるかも

わが體たにうつうつと汗にじみゐて今みな月の
嵐ふきたれ

わがいのち芝居しはに似ると云はれたり云ひたる
をそこ肥りゐるかも

みなづきの嵐のなかに顛かひつつ散るぬば玉の
黒き花みゆ

狂院の煉瓦の角かどを見ゐしかばみなづきの嵐ふ
きゆきにけり

狂じや一人蚊帳よりいでてまぼしげに覆盆子
 食べたしといひにけらすや

ながながと廊下を來つついそがしき心湧きた
 りわれの心に

蚊帳のなかに蚊が二三疋ゐるらしき此寂しさを
 告げやらましを

ひもじさに百日を経たりこの心よるの女人を
 見るよりも悲し

目を吸ひてくろぐろと咲くダアリヤはわが目
 のもとに散らざりしかも

かなしさは日光のもとダアリヤの紅色ふかく
 くろぐろと咲く

うつうつと濕り重たくひさかたの天低くして
動かざるかも

たたなはる曇りの下を狂人はわらひて行けり
吾を離れで

ダアリヤは黒し笑ひて去りゆける狂人は終に
かへり見すけり (六月作)

6 死にまふ母

其の一

ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひ
につつしづ心なけれ

白ふぢの垂花ちればしみじみと今はその實の
見えそめしかも

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんと
ぞいそぐなりけれ

うち日さす都の夜に灯はともりあかかりけれ
ばいそぐなりけれ

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額のへ
に汗いでにけれ

灯あかき都をいでてゆく姿かりそめ旅とひと
見るらんか

たまゆらに眠りしかなや走りたる汽車ぬちに
して眠りしかなや

吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の
國に汽車入りにけれ

朝さむみ桑の木の葉に霜ふれど母にちかづく
 汽車走るなり

沼の上にかぎろふ青き光よりわれの愁の來む
 と云ふかや

上の山の停車場に下り若くしていまは鰥夫の
 おとうと見たり

其の二

はるばると薬をもちて來しわれを目守りたま
 へりわれは子なれば

寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひ
 たまふわれは子なれば

長押なる丹ぬりの檜に塵は見ゆ母の邊の我が
朝日には見ゆ

山いづる太陽光を拜みたりをだまきの花咲き
つゞきたり

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ
天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ
母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたり
といひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべ
に蟻子も生れしか

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たり
けるかな

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲し
もよ蠶のねむり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし
乳足らひし母よ

のぞ赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は
死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死行
くを見たり死ゆくを

ひとり来て蠶のへやに立ちたれば我が寂しさ
は極まりにけり

其の三

✓ 檜^ひわか葉照りひるがへるうつつな^なに山^{やま}蠶^ごは青^{あお}
く生^あれぬ山^{やま}蠶^ごは

日のひかり斑^{まだ}らに漏りてうら悲^{かな}し山^{やま}蠶^ごは未^いだ
小さかりけり

葬^{はな}り道^{みち}すかんぼの華^{はな}ほほけつつ葬^{はな}り道^{みち}べに散
りにけらずや

おきな草^{くさ}口^{くち}あかく咲く野の道に光ながれて我^{われ}
ら行きつも

わが母を焼^やかねばならぬ火^ひを持てり天^{あま}つ空^{そら}に
は見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天
のいつくしきかも

火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身のうた歌
ふかなしく

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけむり
のその煙はや

灰のなかに母をひろへり朝日子のぼるがな
かに母をひろへり

落の葉に丁寧^{ていねい}に集めし骨くづもみな骨瓶^{こつびん}に入
れ仕舞^{しま}ひけり

うらうらと天^{てん}に雲雀^{うんせつ}は啼^なきのぼり雪斑^{ゆきまだら}らなる
山に雲^{うみ}ゐず

ごくだみも薊^{あざみ}の花も焼^やけゐたり人葬^{ひなうり}所の天明^{あけあ}
けぬれば

其の四

かぎろひの春^{はる}なりければ木の芽^{こゝろ}みな吹^ふき出^でる
山^{やま}へ行き^いくわ^られよ

ほのかにも通^{あは}草^{くさ}の花^{はな}の散^ちりぬれば山鳩^{やまとび}のこゑ
現^あるかな

山かげに雉子が啼きたり山かげの酸つばき湯
こそかなしかりけれ

酸の湯に身はすつぽりと浸りゐて空にかがや
く光を見たり

ふるさとのわぎへの里にかへり来て白ふぢの
花ひでて食ひけり

山かげに消のこる雪のかなしさに笹かき分け
て急ぐなりけり

笹はらをただかき分けて行きゆけど母を尋ね
んわれならなくに

火の山の麓にいづる酸の温泉に一夜ひたりて
かなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれて
行きにけるはも

✓はるけくも峽はざまのやまに燃ゆる火のくれなゐと
我が母と悲しき

山腹やまはらに燃ゆる火なれば赤赤とけむりはうごく
かなしかれごも

たらの芽を摘みつつ行けり寂しさはわれより
ほかのものとかはしる

寂しさに堪へて分け入る我が目には黒ぐると
通草の花ちりにけり

✓見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛夷こぶしの花は
ほのかなるかも

藏王山に斑ら雪かもかがやくと夕さりくれば
岨ゆきにけり

しみじみと雨降りるたり山のべの土赤くして
あはれなるかも

遠天を流らふ雲にたまきはる命は無しと云へ
ばかなしき

やま峽に日はとつぷりと暮れたれば今は湯の
香の深かりしかも

湯ごころに二夜ねぶりと蕁菜を食へばさらさ
らに悲しみにけれ

山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははそはの母
よははそはの母よ (五月作)

7 おひろ 其の一

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへ赤からなくに

とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬ
ば玉の夜もふけぬる

夜くればさ夜床に寝しかなしかる面わも今は
無しも小床も

ふらふらとたごきも知らず淺草の丹ぬりの堂
にわれは來にけり

あな悲し観音堂に癡者ゐてただひたすらに錢
欲りにけり

浅草に来てうで卵買ひにけりひたさびしくて
わが歸るなる

はつはつに觸れし子なればわが心今は斑らに
嘆きたるなれ

代々木野をひた走りたりさびしさに生きの命
のこのさびしさに

さびしさびしいま西方にくるくるとあかく入
る日もこよなく寂し

紙くづをさ庭に焚けばけむり立つ戀しきひと
ははるかなるかも

ほろほろとのぼるけむりの天にのぼり消え果
つるかに我も消ぬかに

ひさかたの悲天のもとに泣きながらひと戀ひ
にけりいのちも細く

放り投げし風呂敷包ひろひ持ち抱きてゐたり
さびしくてならぬ

ひつたりと抱きて悲しもひとならぬ瘋癲學の
書のかなしも

うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよ
たごき知らねば

つとめなればけふも電車に乗りにけり悲しき
ひとは遙かなるかも

この朝け山椒の香のかよひ來てなげくこころ
に染みとほるなれ

其の二

ほのほのと目を細くして抱かれし子は去りし
より幾夜か経たる

うれひつつ去にし子ゆるるに藤のはな揺る光り
さへ悲しきものを

しら玉の憂のをんな我に來り流るるがごと今
は去りにし

かなしみの戀にひたりてゐたるとき白ふぢの
花咲き垂りにけり

夕やみに風たちぬればほのほのと躑躅の花は
ちりにけるかも

おもひ出は霜ふるたにに流れたるうす雲の如
かなしきかなや

あさぼらけひと目見しゆるしばだたくろき
まつげをあはれみにけり

わが生れし星を慕ひしくちびるの紅きをんな
をあはれみにけり

しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよ
と言ひて寄りしか

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つつ
くち觸りにけり

たまきはる命ひかりて觸りたれば否とは言ひ
て消ぬがにも寄る

彼のいのち死去ねと云はばなぐさまめ我的心
は云ひがてぬかき

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みつ
のかなしかりけり

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

其の三

愁へつつ去にし子のゆる遠山にもゆる火ほご
の我がこころかな

あはれなる女の臉戀ひ撫でてその夜ほとほと
われは死にけり

このこころ葬らんとして來りぬれ畑には麥は
赤らみにけり

夏されば農園に來て心ぐし水すましをばつか
まへにけり

麥の穂に光ながれてたゆたへば向うに山羊は
啼きそめにけれ

藻のなかに潜むるもりの赤き腹はつか見そめ
てうつつともなし

この心葬り果てんと秀の光る錐を疊にさしに
けるかも

わらし蟲たたみの上に出で來しに烟草のけむ
りかけて我居り

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べ
に降りてゐるかも

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に
雨のふる見ゆ

瑠璃いろにこもりて圓き草の實はわが戀人の
まなこなりけり

ひんがしに星いづる時汝が見なばその眼ほの
ぼのさかなしくあれよ (五月六月作)

8 きさらぎの日

きやう院を早くまかりてひさびさに街を歩め
 ばひかり目に染む

✓ 平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかき下衣を着た
 りけるかも

きさらぎの天のひかりに飛行船ニコライでら
 の上を走れり

杵あまた竝べばかなし一様につぼの白米に落
 ち居たりけり

杵あまた馬のかうべの形せりつぼの白米に落
 ちにけるかも

もろごもに天を見上げし耶蘇士官あかき下衣
を着たりけるかも

きさらぎの市路を來つつほのぼのと紅き下衣
の悲しかるかも

救世軍のをとこ兵士はくれなるの下衣着たれ
ば何とすべけむ

まぼしげに空に見入りし女あり黄色のふね天
馳せゆけば

二月ぞら黄いろき船が飛びたればしみじみこ
をんなに口觸るかなや

この身はも何か知らねごいとほしく夜おそく
みて爪きりにけり 三月作

9 口 ぶ え

このやうに何に頼骨たかきかや觸りて見れば
をんななれども

この夜をわれと寝る子のいやしさのゆゑ知ら
ねども何か悲しき

目をあけてしぬのめぐろと思ほえばのびのび
と足をのばすなりけり

ひんがしはあけぼのならむほそほそと口笛ふ
きて行く童子あり

あかねさす朝明けゆるにひなげしを積みし車
に會ひたるならむ (五月作)

10 神田の火事

これやこの昨日きのの夜よの火ひに赤あかかりし跡あとごころ
なれけむり立ち見ゆ

天明あけけし焼跡やけどごころ焼えかへる火中ひなかに音こゑの聞き
えけるかも

亡なぶるものは悲かなしけれども目の前まへにかかれと
てしも赤あかき火ひにほろぶ

たちのぼる灰燼はいじんのなかにくる眼鏡めがね白しろき眼鏡めがねを
賣うれりけるかも

和わあゆみ眼鏡めがねよろしと言いあげてみづからの眼め
に眼鏡めがねかけたり (三月作)

11 女學院門前

賣藥商人しろき帽子をかかぶりて歌ひしかも
よ薬のうたを

賣薬商人くすりを賣ると足竝をそろへて歌を
うたひけるかも

驢馬にのる少年の眼はかがやけり薬のうたは
向うにきこゆ

芝生には小松きよらに生ひたれば人間道の薬
かなしも

あかねさす晝なりしかば少女らのふりはへ袖
はながかりしかも (三月作)

12 吳竹の根岸の里

にんげんの赤子あかこを負へる子守こもり居りこの子守は
も笑はざりけり

日あたれば根岸の里の川べりの青露のたう揺
りたつらんか

くれたけの根岸里への春淺み屋上やうじやうの雪凝りて
うごかず

天あめのなか光りは出でて今はいま雪さんらんと
かがやきにけり

角兵衛かくべゑのをさな童わらわのをさなさに涙ながれて我
は見んとす

笛の音のそろりほろろと鳴りたれば紅色こうしよくの獅子
子あらはれにけり

いとけなき額ひたひのうへにくれなるの獅子の頭あたまを
見そめしかもよ

春のかせ吹きたるならむ目のもとの光ひかりのなか
に塵うごく見ゆ

ながらふる日光のなかいろいろに我のいのちの
めぐるなりけり

あかあかど日輪天てんにまはりしが猫やなぎこそ
ひかりそめぬれ

くれなるの獅子のあたまは天あまなるや廻轉くわいてん光くわうに
ぬれるたりけり (二月作)

13 さんげの心

雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔の
心かなしかれども

こよひはや學問したき心起りたりしかすがに
われは床にねむりぬ

風引きて寝てゐたりけり窓の戸に雪ふる聞ゆ
さらさらといひて

あわ雪は消^けなば消^ぬがにふりたれば眼^{まなこ}悲しく
消^ぬらくを見む

腹ばひになりて朱の墨すりしころ七面鳥に泡
雪はふりし

ひる目^ひ中床^{なか}の中^{なか}より目をひらき何か見つめん
 と思ほえにけり

雪のうへ照る日光のかなしみに我がつく息は
 ながかりしかも

✓ 赤電車にまなこ閉づれば遠國^{えんこく}へ流れて去^いなむ
 ころ湧きたり

家ゆりてとごろと雪はなだれたり今夜^{こんや}は最早^{さいそう}
 幾時^{いくとき}ならむ

しんしんと雪ふる最上^{さいがみ}の上^{かみ}の山弟^{やま}は無常^{むじやう}を感
 じたるなり

ひさかたのひかりに濡れて縦^たしるやし弟は無
 常を感じたるなり

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪は
なだれ果てたり

天霧らし雪ふりてなんぢが妻は細りつつ息を
つかんとすらし

あまつ日に屋上の雪かがやけりしづごころ無
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪に見入りつつ何を求め
むとする心ぞも

いまわれはひとり言いひたれどもあはれ哀れ
かかはりはなし

家にゐて心せはしく街ゆけば街には女おほく
ゆくなり (二月作)

14 墓 前

ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり (八月作)



14 墓 前

ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり (八月作)



明治四十五年
大正元年

1 雪ふる日

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもる見ゆ

現身うらみのわが血脈けちみのやや細り墓地にしんしんど
雪つもる見ゆ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ囚人のこころ
われに湧きたり

わが庭に驚ら啼きてゐたれども雪こそつもれ
庭もほごろに

ひさかたの天の白雪ふりきたり幾とき経ねば
つもりけるかも

批把の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐み
しまらくも見し

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひの
しらじらと降る

天つ雪はだらに降れごさにづらふ心にあらぬ
心にはあらぬ (十二月作)

2 宮 益 坂

莊嚴しやうげんのをんな欲ほして走りたるわれのまなこに
高山たかやまの見ゆ

風を引き鼻汗はなながれたる一人男ひとりをとこは駈足かきをせず
富士の山見けり

これやこの行くもかへるも面黄めんわうなる電車終點
の朝ぼらけかも

狂者きやうしやもり眼鏡めがねをかけて朝ぼらけ狂院へゆかず
富士の山見居り

馬うまに乗りりくぐん將校きたるなり女難にまがたの相か
然しかにあらずか

向ひには女は居たり青き甕もち童子ごうじになにか
いひつけしかも

天竺のほどけの世より女人なんな居りこの朝ぼらけ
をんな行くなり

雪ひかる三國一の富士山ふじさんをくちびる紅き女も
見たり(十二月作)

3 折に觸れて

くろぐろと圓まらに熟うるる豆柿まめかきに小鳥こどりはゆきぬ
つゆじもはふり

藏王山に雪かもふるといひしときはや班はたらなり
といらへけらすや

狂者らは Paederastie をなせりけり夜しんしんと
更けがたきかも

ゴオガンの自畫像みればみちのくに山蠶殺し
しその口おもほゆ

をりをりは腦解剖書讀むことありゆゑ知らに
心つつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきた
りつつ消えにけるかも

身ぬちに重大を感せざれども宿直まゐりのよるにう
なじ垂れぬし

この里まきに大山大將住むゆゑにわれの心の嬉し
かりけり (十二月)

4 青山の鐵砲山

赤き旗けふはのぼらずごんたくの鐵砲山に小
供らが見ゆ

日だまりの中なかに同様のうなゐらは皆走りつつ
居たりけるかも

銃丸を土より掘りてよろこべるわらべの側そばを
行き過ぎりけり

青竹を手に振りながら童子ごうじ来て何か落ちぬ
面おももちをせり

ゆふ日とほく金かねにひかれば群童は眼めつむりて
斜面をころがりけり

群童が皆ころがれば丘のへの童女かなしく笑
ひけるかも

いちにんの童子ころがり極まりて空見たるか
な太陽が紅し

射的場に細みづ湧きて流れければ童ふたりが
水のべに來し (十月作)

5 ひごりの道

霜ふればほろほろと胡麻の黒き實の地につく
なし今わかれなむ

夕凝りし露霜ふみて火を戀ひむ一人のゆるるに
こころ安けし

ながらふるさ霧のなかに秋花を我摘まんぞす
人に知らゆな

白雲は湧きたつらむか我ひとり行かむと思ふ
山のはざまに

神無月空の果てよりきたるとき眼ひらく花は
あはれなるかも

獨りなれば心安けし谿ゆきてくちびる觸れむ
木の實ありけり

ひかりつつ天を流るる星あれど悲しきかもよ
われに向はず

行くかたのうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤きに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつつ峽かきに入りけり

みなし兒に似たるころは立ちのぼる白雲に
入りて歸らんとせず

もみぢ斑に照りとほりたる日の光りはざまに
われを動かざらしむ

わが歩みここに極まれ雲くだるもみぢ斑のな
かに水のみにけり

はるばるも山峽やまに来て白樺びやうに觸さわりて居たり獨ひび
りなりけれ

ひさかたの天あまのつゆじもしとどとど獨り歩ま
む道ほそりたり (十一月作)

6 葬り火

黄涙餘録の一

あらはなる棺ひつぎはひとつかつがれて穩田ひつぎばしを
今わたりたり

自殺じくせし狂者きやうじやの棺くわんのうしろより眩暈めまひして行け
り道みちに入い日ひあかく

陸橋りくきやうにさしかかるとき兵へい來れば棺ひつぎはしまし地つち
に置おかれぬ

泣なきながすわれの涙なみだの黄きなりとも人に知らゆ
な悲かなしきなれば

鴉からすらは我われはねむりて居ゐたるらむ狂人きやうじんの自殺じく果
てにけるはや

死なねばならぬ命いのちまでもりて看護婦はしろき火
かかぐ狂院のよるに

自みづからのいのち死なんと直ひたいそぐ狂人を守りて
火も戀ひねごも

土のうへに赤棟あかむね蛇遊ばすなりにけり入る日あ
かあかど草はらに見ゆ

歩兵隊代々木あやむらのはらに群れるしが狂人きやうじんのひつ
ぎひとつ行くなり

赤光あかひかりのなかに浮びて棺くわんひとつ行き遙はるけかり野
は涯はてならん

わが足より汗いでてやや痛みあり靴にたまり
し土ほこりかも

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひとが
米を磨ぎたれば

死はも死はも悲しきものならざらむ目のもと
に木の實落つたはやすきかも

兩手をばズボンの隠しに入れ居たりおのが身
を愛しと思はねごさびし

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはら
に男居りけり

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをどこ
が欠伸をしたり

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾
くゆふさり來り

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならび
たりけり

上野なる動物園にかささぎは肉食ひるたりく
れなるの肉を

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡の
ほこり拭ふなりけり

7 冬

來

黄涙餘録の二

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世
に戦きにけり

けだものは食もの戀ひて啼き居たり何といふ
やさしさぞこれは

ペリガンの嘴くちばしうすら赤くしてねむりけりかた
はらの水みづ光ひかりかも

ひたいそぎ動物園にわれは來きたり人のいのち
をおそれて來きたり

わが目より涙ながれて居たりけり鶴つるのあたま
は悲しきものを

けだもののにほひをかげば悲しくもいのちは
明あきらく息いきづきにけり

支那しな國こくのほそき少女せうじゆの行きなづみ思ひそめに
しわれならなくに

さけび啼なげくけだもの邊へに潜ひそみゐて赤あかき葬はなり
の火ひこそ思おもへれ

鱈の子も居たりけりみづからの命死なんどせ
すこの鱈の子は

くれなるの鶴のあたまを見るゆゑに狂人守を
かなしみにけり

はしきやし曉星學校の少年の頬は赤羅ひきて
冬さりにけり

泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをれば
しづかなるかも

除隊兵寫眞をもちて電車に乗りひんがしの天
明けて寒しも

はるかなる南のみづに生れたる鳥ここにゐて
なに欲しむ啼く

8 柿乃村人へ

黄涙餘録の三

この夜ごろ眠られなくに心すら細らんとして
告げやらましを

たのまれし狂者きやうじやはつひに自殺せりわれ現うつつなく
走りけるかも

友のかほ青ざめてわれにももの云はず今は如何
なる世の相すがたかや

おのが身はいさほしければ赤棟蛇も潜みたる
なり土の中なまふかく

世の色相いろさうのかたはらにゐて狂者もり黄なる涙
は湧きいてにけり

やはらかに弱きいのちもくろぐると甲はんと
してうつつともなし

寒ぞらに星ゐたりけりうらがなしわが狂院を
ここに立ち見つ

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗來より悲し
かるらむ

みやこにも冬さりにけり茜さす日向のなかに
髭剃りて居る

遠國へ行かば剃刀のひかりさへ馴れて親しと
いへば歎かゆ (十一月作)

9 郊外の半日

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來
て寒けをおぼゆ

和むとすらん
郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは

冷たきものを
郊外に未だ落ちぬころもて嘆はつにたぎれば

秋のかせ吹きてゐたれば遠かたの薄すすのなかに
曼珠沙華赤し

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し
秋かせが吹き

いちめんの唐辛子畑に秋のかせ天あまより吹きて
鴉からすおりたつ

いちめんいに唐辛子あかき畑みちに立てる童わらわの
まなこまさし

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現身うつしに似ぬ
囚人は出づ

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元あしもと
の日の光かも

赭土あかはこぶ囚人しうじんの眼めの光るころ茜あざさす日は傾
きにけり

トロツコを押す一人いちじんの囚人はくちびる赤し我われ
をば見たり

片方に松二もとは立てりしが囚はれ人は其處
を通りぬ

秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家
の日向に蠅居り

女のわらは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄
子のか黒きひかり

天傳ふ日は傾きてかくろへば栗煮る家にわれ
いそぐなり

いとまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せば
悲しこよなし

コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に残
る光を見つつ (十月作)

10 海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚にはくれなるの玉
ぬれてゐるかな

海の香は山の彼方に生れたるわれのこころに
こよなしかしも

七夜寝て珠ゐる海の香をかげば哀れなるかも
この香いとほし

白なみの寄するなぎさに林檎食む異國をみな
はやや老いにけり

あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅
のゆらゆらに見ゆ

きこゆるは悲しきさざれうち浸す潮波とどろ
湧きたるならむ

うしほ波鳴りこそきたれ海戀ひてここに寝る
吾に鳴りてこそ來れ

もも鳥はいまだは啼かね海のなか黒光りして
明けくるらむか

岩かげに海ぐさふみて玉ひろふくれなるの玉
むらさき斑のたま

海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのこころ
に染みてこそ寄れ

櫻實の落ちてありやと見るまでに赤き珠住む
岩かげを來し

ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野小草
に似てを悲しも

荒磯べに歎くともなき蟹の子の常くれなるに
見ゆらむあはれ

かすかなる命をもちて海つもの美しくゐる荒
磯なるかな

いささかの潮のたまりに赤きもの生きて居た
れば嬉しむかな

荒磯べに波見てをればわが血なし瞬きの間も
かなしかりけり

海のべに紅毛の子の走りたるこのやさしさに
我かへるなり

かぎろひの夕なぎ海に小舟入れ西方さいほうのひとは
ゆきにけるはも

くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えすも

月ほそく入りなんとする海の上ここよ遙けく
舟なかりけり

ぬば玉のさ夜ふけにして波の穂の青く光れば
戀しきものを

けふもまた岩かげに來つ靡き藻に虎斑魚とらまだらの子
かくろへる見ゆ

しほ鳴なのゆくへ悲しと海のべに幾夜か寝つる
この海のべに

11 狂人守

うけもちの狂人きやうじんも幾たりか死にゆきて折をりをり
あはれを感じるかな

かすかなるあはれなる相すがたありこれの相すがたに親し
みにけり

くれなるの百日紅は咲きぬれど此このきやうじん
はもの云はずけり

としわかき狂人きやうじん守りのかなしみは通草の花の
散らふかなしみ

氣のふれし支那のをみなに寄り添ひて花は紅
しと云ひにけるかな

このゆふべ脳病院の二階より墓地見れば花も
見えにけるかな

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゝるらむ

あはれなる百日紅の下かげに人力車ひとつ見
えにけるかな (九月作)

12 土屋文明へ

おのが身をあはれとおもひ山みづに涙を落す
人居たりけり

ものみなたの體ゆるがごとき空戀ひて鳴かねば
ならぬ蟬のこゑき聞ゆ

もの書かむと考へるたれ耳ちかく鯛なけばあ
はれにきこゆ

夕さればむらがりにて来る油むし汗あえにつつ
殺すなりけり

かかる時菴羅あんらの果をも戀こひたらば心落居むと
おもふ悲しみ

むらさきの桔梗のつぼみ割りたれば蓋しよあらは
れてにくからなくに

秋ぐさの花さきにけり幾朝をみづ遣りしかと
おもほゆるかも

ひむがしのみやこの市路ひとつのみ朝草ぐる
ま行けるさびしも (七月作)

13 夏の夜空

墓原に来て夜空見つ目のきはみ澄み透りたる
この夜空かな

なやましき眞夏なれども天なれば夜空は悲し
うつくしく見ゆ

きやう人を守りつつ住めば星のゐる夜ぞらも
久に見ずて經にけり

目をあげてきよき天の原見しかども遠の珍の
ここちこそすれ

ひさびさに夜空を見ればあはれなるかな星群
れてかがやきにけり

空見ればあまた星居りしかれども彌々どほく
ひかりつつ見ゆ

汗ながれてちまたの長路ゆくゆるにかうべ垂
れつつ行けるなりけり

久ひさに星ぞらを見て居りしかばおのれ親し
くなりてくるかも (七月作)

14 折々の歌

ころころとあかき落葉火もえしかば女の男の
童をどりけるかも

雨ひと夜さむき朝けを目の下の死なねばなら
ぬ鳥見て立てり

をんな寝る街の悲しきひそみ土ここに白霜は
消えそめにけり

猫の舌のうすらに紅き手の觸りのこの悲しさに
目ざめけるかも

ほのかなる茗荷の花を見守る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたま
けてひもじかりけり (研究室二首)

屈まりて脳の切片を染めながら通草のはなを
おもふなりけり

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶり
目ざめけらしも (故郷三首)

障^さみちのくに病む母上にいささかの胡瓜^きを送る
りあらすな

おきながさに唇^{くちびる}ふれて歸りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつも

曼珠沙華^{まんじゆさわ}ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の
相^{すがた}あらはれにけり

秋に入る練兵場のみづたまりに小蜻蛉^{こせみづか}が卵を
生みて居りけり

現身^{うつし}のわれをめぐりてつるみたる赤き蜻蛉^{せきせみづか}が
幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室^{むろ}に食^はむこころ腎虚^{じんきよ}のくすり
尋ねゆくこころ

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば
飲ませてゐたり

太陽はかくろひしより海のうへ天の血垂りの
こころよろしき

狂院に寝てをれば夜は温るし我に觸るるなし
蟾蜍は啼きたり

伽羅ぼくに伽羅の果こもりくろき猫ほそりて
あゆむ夏のいぶきに

蛇の子はぬば玉いろに生れたれば石の間にも
かくろひぬらむ

ほそき雨墓原に降りぬれてゆく黒土に烟草の
吸殻を投ぐ

墓はらを白足袋はきて行けるひと遠く小さく
悲しかりけり

萱草くわんそうをかなしと見つる眼にいまは雨にぬれて
行く兵隊が見ゆ

墓はらを歩み來にけり蛇の子を見むと來つれ
ど春あさみかな

病院をいでて墓原かげの土踏めば何なにになごみ
來しあが心ぞも

松風の吹き居かるところくれなるの提灯つけて
分け入りにけり

15 さみだれ

さみだれは何なにに降りくる梅の實は熟うみて落つ
らむこのさみだれに

にはどりの卵の黄味の亂れゆくさみだれごろ
のあぢきなきかな

胡ぐ頰か子の果のあかき色ほに出づるゆゑは秀しに出
づるゆゑはに歎かひにけり (おくにを憶ふ)

ぬば玉のさ夜のこ小床にねむりたるこの現うつ身しは
いとほしきかな

しづかなる女おもひてねむりたるこの現うつ身しは
いとほしきかな

鳥の子の鰯うまづきに果てむこの心もののはれと云
はまくは憂し

あが友の古泉千楳は貧しけれさみだれの中を
あゆみゐたりき

けふもまた雨かどひとりごちながら三州味噌
をあぶりて食はむも (六月作)

16 兩 國

肉し太ぎの相撲すまどりこそかなしけれ赤き入り日に
日まかげをしたり

川かは向むかの金の入目をいまさらに今さらさらに我
も見入りつ

猿の肉ひさげる家に灯ひがつきてわが寂しさは
極ままりにけり

猿の面おもいと赤くして殺されにけり兩國にばしを
渡り来て見つ

きな臭くさき火繩おもほゆ藥種屋に龜の甲羅のぶ
らさがり見ゆ

笛鳴ればかかれとてしもぬば玉の夜よの灯ひとも
りて舟ゆきにけり

冬河の波にさやりてのぼる舟橋のべに来て帆
を下ろしつ

あかき面安らかに垂れ稚わかな猿死にてし居れば
灯ひがあたりたり (二月作)

17 犬の長鳴

よる深くふと握飯食ひたくなり握めし食ひぬ
寒がりにつつ

わが體ねむらむとしてゐたるとき外はこがら
しの行くおときこゆ

遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は
行きにけるかも

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火
は燃えにけり

さ夜ふけと夜の更けにける暗黒にびようびよ
うと犬は鳴くにあらずや

たちのぼる炎ほのほのにほひひま一天あめを離まりて犬は感じ
けるはや

夜よの底そこをからくれなるに燃ゆる火の天あめに輝てり
たれ長鳴ながなききこゆ

生けるものうつつに生けるけだもの獣はくれなるの火
に長鳴ながなききにけり (三月作)

18 木 ころり

羽前國高湯村

常赤こゝろく火をし焚たかんと現うし身みは木原きはらへのぼる
こころのひかり

山腹やまはらの木はらのなかへ堅凝かたごりのかがよふ雪を
踏みのぼるなり

天てんのもと光にむかふ檜木ひのきはら伐こらんとぞする
男おとこをんな

をそこ群むれをんなは群むれてひさかたの天てんの下
びに木を伐きりにけり

✓さんらんと光ひかりのなかに木伐こりつつにんげんの
歌うたひけるかも

✓ゆらゆらと空そら氣を揺ゆりて伐きられたりけり斧の
ひかれば大木おほきひともと

山さん上じやうに雲くもこそ居かたれ斧のふりてやまがつの目は
かがやきにけり

うつそみの人のもろもろは生いきんとし天てん然ねんの
なかに斧のふり行くも

斧ふりて木を伐るそばに小夜床の陰のかなし
 さ歌ひてゐたり

もちともに男の面の赤赤と小雀もゐつつ山み
 づの鳴る

雪のうへ行けるをんなは堅飯と赤子を脊負ひ
 うたひて行けり

雪のべに火がとろとろと燃えぬれば赤子は乳
 をのみそめにけり

うち日さす都をいでてほそりたる我のこころ
 を見んとおもへや

杉の樹の肌はだに寄ればあな悲し
 くれなるの油あぶら
 滲み出るかなや

はるばるも來つれこころは杉の樹の紅の油に
寄りてなげかふ

遠天とんに雪かがやけば木原なる大鋸おのこくづ越えて
小便をせり

みちのくの藏王ざうわうの山のやま腹にけだものど人
と生きにけるかも (三月作)

19 木の實

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程いくばくもなき
歩みなりけり

満ち足らふ心にあらぬ 谷つべに酢すをふける
木の實を食はむころかな

山とほく入りても見なむうら悲しうら悲しと
ぞ人いふらむか

紅べ草その雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず
見つつ來にけり

山ふかく谿たにの石原いしはらしらじらと見えなるほどの
いとほしみかな

かうべ垂れ我がゆく道にぼたりぼたり橡くわの木
の實は落ちにけらすや

ひとり居ゐて朝の飯食いひむ我が命は短かからむと
思おもひて飯はむ 二月作

20 睦岡山中

寒^{さむ}ざむとゆふぐれて来る山のみち歩めば路は
 濕^ぬれてゐるか

山ふかき落葉のなかに夕^{ゆふ}のみづ天^{てん}より降^ふりて
 ひかり居りけり

何ものの眼^{まなこ}のごときひかりみづ山の木はらに
 動かざるかも

現し身の瞳^{ひとみ}がなしく見入りぬる水はするごとく
 寒くひかれり

都會のごよみをどほくこの水に口觸れまくは
 悲しがるらむ

天さかる鄙ひなの山路にけだものの足跡あしあとを見れば
 こころよろしき

なげきより覺さめて歩める山峽やまがひに黒き木の實は
 こぼれ腐りぬ

寂さびしさに堪へて空しき我が肌あに何か觸ふれて來こ
 悲かなしかるもの

ふゆ山にひそみて玉のあかき實みを啄つみてゐる
 鳥見つ今は

風おこる木原きはらをとほく入りつ日の赤き光りは
 ふるひ流るも

赤光しやくくわうのなかの歩みはひそか夜の細きかほそき
 ゆめごころかな (二月作)

21 或る夜

くれなるの鉛筆きりてたまゆらは慎しきかな
われのころの

をさな妻をどめとなりて幾百日こよひも最早
眠りゐるらむ

寝ねがてにわれ烟草すふ烟草すふ少女は最早
眠りゐるらむ

いま吾は鉛筆をきるその少女安心をして眠り
ゐるらむ

わが友は密柑むきつつ染じみとはや抱きねと
いひにけらすや

けだものの暖かさうな寝すがた思ひうかべて
獨りねにけり

寒床にまろく縮まりうつらうつら何時のまに
かも眠りゐるかな

水のべの花の小花の散りどころ盲目になりて
泡かれて呉れよ (二月作)

明治四十四年

1 此の日頃

よるさむく火を警むるひようしぎの聞え來る
頃はひもじかりけり

この宵はいまだ淺けれ床ぬちにのびつつ何か
考へむとおもふ

尺八のほろほろと行く悲し音はこの世の涯に
遠ざかりなむ

入りつ目の赤き光のみなざらふ花野はとほく
恍惚溶くるなり

さだめなきものの魔の來る如く胸ゆらぎして
街をいそげり

うらがなしいかなる色の光はや我のゆくへに
かがよふらむか

生くるもの我のみならず現し身の死にゆくを
聞きつつ飯食しにけり

をさな兒のひとり遊ぶを見守りつつ心よろし
くなりてくるかも (二月作)

2 おくに

なにか言ひたかりつらむその言も言へなくな
りて汝は死にしか

はや死にてゆきしか汝いとほしと命のうち
吾はいひしかな

とほ世べに往なむ今際の目にあはず涙ながら
に嬉しむものを

なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に
吾は言へりしか

これの世に好きななんぢに死にゆかれ生きの
命の力なし我は

あのやうにかい細りつつ死にし汝があはれに
なりて居りがてぬかも

ひとたびは癒りて呉れよとうら泣きて千重に
いひたる空しかるかな

この世にも生きたかりしか一念も申さず逝き
しよあはれなるかも

何も彼もあはれになりて思ひづるお國のひと
世はみぢかかりしか

にんげんの現實は悲ししまらくも漂ふごとき
ねむりにゆかむ

やすらかな眠もがもと此の日ごろ眠ぐすりに
親しみにけり

なげかひも人に知らえず極まれば何なにに絶りて
吾は行きなむか

しみ到いたるゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおき
のなつかしきかも

現うつ身のわれなるかなと歎なげかひて火鉢をちかく
身に寄せにけり

ちから無く鉛筆きればほろほろと紅くわなの粉が落
ちてたまるも

灰のへにくれなるの粉の落ちゆくを涙ながし
ていとほしむかも

生きてゐる汝ながすがたのありありと何なにに今頃
見えきたるかや (二月作)

3 うつし身

雨にぬるる廣葉細葉のわか葉森あが言ふ聲の
やさしくきこゆ

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の揺も
見むとしおもふ

しみじみとおのに親しきわがあゆみ墓はらの
蔭に道ほそるかな

やはらかに濡れゆく森のゆきすりに生いきの疲つかれの
吾をこそ思へ

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふる
よ若葉かへるで

にんげんは死にぬ此のごと吾は生きて夕いひ
食しに歸へらなむいま

黒土に足駄の跡の弱けれごおのが力とかへり
見にけり

うちごよむ衢のあひの森かげに残るみづ田を
いとしくおもふ

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして
雨ふりにけり

森かげの夕ぐるる田に白きとり海とりに似し
ひるがへり飛ぶ

寂し田に遠來し白鳥見しゆるゑに弱ければ吾は
うれしくて泣かゆ

くわん草は丈^{たけ}ややのびて濕^{しめ}りある土に戦^{たたか}げり
このいのちはや

はるの日のながらふ光に青き色ふるへる麥の
嫉^{あやま}くてならぬ

春淺き麥のはたけにうごく蟲^{むし}手^たぐさにはすれ
悲しみわくも

うごき行く蟲を殺してうそ寒く麥のはたけを
横^{よこ}ぎりにけり

いとけなき心^{こころ}葬^{はな}りのかなしさに蒲^{たん}公^{こう}英^{えい}を堀^ほる
せとの岡^{おか}べに

仄^{ひそ}かにも吾^{われ}に親^{かた}しき豫^{かほ}言^{ごん}をいはまくすらしき
黄^{わう}いろ玉^{たま}はな (四月五月作)

4 うめの雨

おのが身をいとほしみつつ歸り來る夕細道に
柿の花落つも

はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば
共に行きなむ

さみだれのけならべ降れば梅の實の圓大きく
ここよりも見ゆ

天に戦ぐほそ葉わか葉に群ぎもの心寄りつつ
なげかひにけり

かぎろひのゆふさりくれぞ草のみづかくれ水
なれば夕光なしや

ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙かへるはあはれ
啼きたるかなや

うつそみの命は愛なしとなげき立つ雨の夕原ゆふはらに
音ねするものあり

くろく散る通草あけびの花のかなしさを稚なくてこそ
おもひそめしか

おもひ出も遠き通草の悲し花きみに知らえず
散りか過ぎなむ

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる
夜の雨ふり

汝兄なよ汝兄なたまごが鳴くといふゆるに見に行
きければ卵が鳴くも

あぶなくも覺束おぼつかなけれ黄いろなる圓さうぶ毛
が歩みてゐたり

見てを居り心よろしも鶏の子はつ**い**ばみ乍なら
ゐねむりにけり

庭つとり鶏かひのひよこも心こゝろがなし生れて鳴けば
母にし似るも

乳のまぬ庭どりの子は自おのづから哀あはれなるかも
よもの食けみにけり

常のごと心足らはぬ吾にあれひもじくなりて
今かへるなり

たまたまに手など觸れつつ添かひ歩む枳か殻た垣ちに
ほこりたまれり

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさ
のうらがなしかり

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそと
別れゆくかも

天さかり行くらむ友に口寄せてひそかに何か
いひたきものを（五月六月作）

5 藏王山

藏王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻あづまの山に
雲のゐる見ゆ

たち上のぼる白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり
白くものなかに

ま夏日の日のかがやきに櫻の實熟みて黒しも
われは食みたり

あまつ日に日陰をすれば乳いろの湛かなしき
みづうみの見ゆ

死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色
みづ見ゆるかな

秋づけははらみてあゆむけどものも酸のみづ
なれば舌觸りかねつ

赤蜻蛉むらがり飛べこのみづに卵うまねば
かなしかりけり

ひんがしの遠空にして絹いそのひかりは悲し
海つ波なれば (八月作)

6 秋の夜ごろ

玉きはる命いのちをさなく女童わらわをいだし遊びき夜半よ
のこほろぎ

こよひも生きてねむるとうつらうつら悲しき
蟲を聞きほくるなり

ことわりもなき物怨ものうらみみ我身わがみにもあるが愛いとしく
蟲ききにけり

少年の流されびとのいさほしと思ひにければ
こほろぎが鳴く

秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土を
かなしみにけり

少年の流され人はさ夜の
小床に蟲なくよ何の
蟲よといひけむ

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに
堪へにけるかな

蟋蟀の音にしるる夜の静けさにしろがねの錢
かぞへてゐたり

紅き日の落つる野末の石の間のかそけき蟲に
あひにけるかも

足もとの石のひまより静けさに顛ひて出づる
音に頼りにけり

入りつ日の入りかくるへば露滿つる秋野の末
にこほろぎ鳴くも

うちごよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る
原にわれは來にけり

星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりに
こほろぎ鳴くも

こほろぎのかそけき原も家ちかみ今ほほ笑ふ
女の童わらはきこゆ

はるばると星落つる夜の戀がたり悲しみの世
にわれ入りにけり

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな
夕ひかりつつ

女の童わらはをさめとなりて泣きし時かなしく吾は
おもひたりしか

さにづらふ少女ごころに酸漿はばの籠こもらふほどの
悲しみを見し

ひとり歩む玉ひや冷とうら悲し月より降りし
草の上の露

こほろぎはこほろぎゆるゑに露原に音をのみぞ
鳴く音をのみぞ鳴く (九月作)

7 折に觸れて

なみだ落ちて懐なつかしむかもこの室へやにいにしへ人
は死に給ひにし (宇規十周忌三首)

自みづからをさげすみ果てし心すら此夜はあはれ
和なごみてを居ぬ

しづかに眼をつむり給ひけむ自づからすべて
は冷たくなり給ひけむ

涙ながししひそか事も、消ゆるかや、吾より
秋なれば桔梗は咲きぬ (録三首)

きちかうのむらさきの花萎む時わが身は愛し
とおもふかなしみ

さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしき
ことありあはれあはれわが少女

栗の實の笑みそむるころ谿越えてかすかなる
灯に向ふひとあり (録三首)

かごはかしに逢へるをよめのうつくしと思ひ
通ひて谿越えにけり

うつくしき時代なるかな山賊はもみづる谿に
いのち落せし

おのづからうら枯るるらむ秋ぐさに悲しかる
かも實籠りにけり

ひさかたの霜ふる國に馬群れてながながし路
くだるさみしみ

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを
愛しとなげけり

照り透るひかりの中に消ぬべくも蟋蟀と吾と
なげかひにけり

つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寐より
さめ聞くながれ水かな

朝さざれ踏みの冷めたくあなあはれ人の思おもひの
湧ききたるかも

秋川のさゞれ踏み行き踏み來とも落ちぬ心
君知るらむか

土のうへの生けるものらの潜ひそむべくあな慌し
秋の夜の雨

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽も
ひろげず

寒ざむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥
をいたはり兼ねつ

ほそほそそこほろぎの音はみちのくの霜ふる
國へとほ去りぬらむ

8 遠き世のガレノスは春のあけぼの
Ornamentum loei をかなしみぬ。われは
東海の國の伽羅の木かげ Pluma loei
いひてなげかふ。

伽羅ほくのこのみのごとく灰かなるはかなき
ものか Pluma loei よ

ほのかなるものなりければをさめごはほほと
笑ひてねむりたるらむ

明治四十三年

1 田螺と彗星

どほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺
はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも脊戸の圓田まうたにゐると鳴かねどころり
ころりと幾つもあるも

わらくすのよごれて散れる水無田に田螺の殻
は白くなりけり

氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べ
てよるいねにけり

赤いろの蓮はらすまる葉の浮けるとき田螺はのどに
みごもりぬらし

味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉のどけ佛
うれしがり鳴る

南蠻の男かなしと戀ひ生みし田螺にほとけの
性なまともしかり

ためらはす遠天に入れと彗星の白きひかりに
酒たてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほごなる
ははき星をり

きさらぎの天たかくして彗星ありまなこ光り
てもろもろは見る

入り日ぞら暮れゆきたれば尾を引ける星にむ
かひて子等走りたり

2 南蠻男

くれなるの千しほのころも肌につけゆららゆ
ららに寄りもこそ寄れ (録八首)

南蠻のをそこかなしと抱かれしをだまきの花
むらさきのよる

なんばんの男いだけば血のこゑすその時のま
の血のこゑかなし

南より笛吹きて来る黒ふねはつばくらめより
かなしかりけり

夕がらす空に啼ければにつぼんの女のくちも
あかく觸りぬれ

入り日空見たる女はうらぐはし乳房おさへて
居たりけるかな

瞳青きをこ悲しと島をこめほのぼのとして
みごもりにけり

なんばんの黒ふねゆれてはてし頃みごもりし
人いまは死にせり

にほひたる疊のうへに白たまの静まりたるを
見すぐしがてぬ (録三首)

しらたまの色のにほひを哀あはれとぞ見し玉ゆらの
われやつみびと

罪ひとの觸れんとおもふしら玉の戦まのきたらば
すべなからまし



にほひたる曇のうへに白たまの静まりたるを
見すぐしがてぬ (雑三首)

しらたまの色のにほひを哀とぞ見し玉ゆらの
われやつみびと

罪ひとの觸れんとおもふしら玉の戦きたらば
すべなからまし



3をさな妻

墓はらのとほき森よりほろほろと上^のるけむり
に行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさに
づらふ時たちにけり

をさな妻こころに持ちてあり
 経れば赤き蜻蛉とんぼ
 の飛ぶもかなしも

目を閉づれすなはち見ゆる
 淡々し光に戀ふる
 もさみしかるかな

ほこり風立ちてしづまるさ
 みしみを市路ゆき
 つつかへりみるかも

このゆふべ屏にかわけるさ
 び紅まゆのべにがらの
 垂りをうれしみにけり

公園に支那のをとめを見る
 ゆるに幼な妻もつ
 この身愛しけれ

嘴くちばしあかき小鳥さへこそ飛ぶ
 ならめはるばる飛
 ばは悲しきろかも

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどの
うれひなりけり

水さびるる細江の面に浮きふふむこの水草は
うごかざるかな

汗ばみしかうべを垂れて抜け過ぐる公園に今
しづけさに會ひぬ

をさな妻をさなきままにその目より涙ながれ
て行きにけるかも

をだまきの咲きし頃よりくれなるにゆららに
落つる太陽こそ見にけれ

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細
りたるなれ (折々の作)

4 悼堀内卓

堀内はまこと死にたるかありの世か
いめ世かくやしいたましきかも

信濃路のゆく秋の夜のふかき夜をなにを思ひ
つつ死にてゆきしか

うつそみの人の國をば君去りて何邊にゆかむ
ちちははをおきて

早はやも癒りて來よと祈むわれになにゆゑに
逝きし一言もなく

いまよりはまことこの世に君なきかありと思
へごうつつにはなきか

深き夜のとづるまなこにおもかげに見えくる
友をなげきわたるも

霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつゝ聞か
むと思ひたりしか（十月作）

自明治三十八年
至明治四十二年

1 折に觸れ

明治三十八年作

黒き實の圓らつぶらとひかる實の柿は一本た
ちにけるかも

浅草の佛つくりの前來れば少女まぼしく落日
を見るも

本よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢を呉れ
たまひたり

戦場のわが兄より來し錢もちて泣きゐたりけ
り涙が落ちて

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひてちぎりて居れ
ばにほひするかも

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実は
熟みゐたりけり

けふの日は母の邊にゐてくるぐると熟める桑
の実食みにけるかも

かがやける眞夏日のもとたらちねは戦を思ふ
桑の実くろし

馬^ま屋^やのべにをだまきの花^{はな}乏^さしらにをりをり馬
が尾を振りにけり

數學のつもりになりて考へしに五目竝べに勝
ちにけるかも

熱いでて一夜^{ひよ}寝しかばこの朝^あけ梅のつばみを
つばらかに見つ

春かせの吹くことはげし朝^あぼらけ梅のつばみ
は大きかりけり

入りかかる日の赤きころニコライの側^{かた}の坂を
ば下^おりて來にけり

寝て思へば夢^{ゆめ}の如^{ごと}かり山^{やま}焼けて南の空ははの
赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝ちりしばらく見ねば
みな散りにけり

日輪がすでに眞赤になりたれば物干ものほしにいでて
欠伸せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まり
て何もせず居り

2 地獄極樂園圖

明治三十九年

淨玻瓈じやうはにあらはれにけり脇差わきざしを差して女をんなをい
ちめるところ

飯いひの中なかゆとろとろと上のぼる炎ほのほ見てほそき炎口えんぐちの
おごろくところ

赤き池いけにひとりぼつちの眞裸まはだかのをんな亡者もうじやの
泣きゐるところ

いろいろの色の鬼おにども集りて蓮はらすの華はなにゆびさ
すところ

人の世うそに嘘うそをつきけるもろもろの亡者もうじやの舌を
抜き居ゐるところ

罪計つみはかりに涙なみだながしてゐる亡者もうじやつみを計れば巖いはほよ
り重おもき

にんげんは馬牛うまうしとなり岩負いわおひて牛頭馬頭ごづめづめども
の追おひ行くところ

をさな兒この積みし小石こいしを打うくづし紺こんいろの鬼
見てゐるところ

もろもろは裸はだかになれと衣ころも剥ぐひとりの婆の口
赤きところ

白き華はなしろくかがやき赤き華赤き光りを放ち
あるところ

あるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆら
と下おり來るところ

螢

晝見れば首筋
あかき螢かな 芭蕉

蠶この室むに放ちしほたるあかねさす晝なりけれ
ば首は赤しも

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて
飛びて居りけり

あかどきの草の露たま七いろにかがやきわた
り蜻蛉せみ生なれけり

あかどきの草に生れて蜻蛉せみはも未だ軟やわらかみ
飛びがてぬかも

小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生なれし蜻せみ
蛉なもかがやきにけり (明治三十九年作)

折に觸れて

明治三十九年作

来て見れば雪げの川べ白がねの柳ふふめり露
の臺も咲けり (三首)

あづさ弓春は寒けご日あたりのよろしき處つ
くづくし萌ゆ

生きて來しまさ丈夫らふがおも赤くなりををごるを見れば嬉しくて泣かゆ (三首)

凱旋かへり來て今日のうたげに酒をのむ海のみす
らをに髯あらずけり

み佛の生あれましの日と玉蓮たまはらをさな朱あけの葉池に
浮くらし (三首)

み佛のみ堂に垂るる藤なみの花の紫いまだと
もしも

青玉のから松の芽はひさかたの天あまにむかひて
竝びてを萌ゆ (三首)

春さめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねくふ
くらみにけり

みちのくの佛ぼんぎの山のこごしこごし岩いは秀ほに立ち
て汗ふきにけり (立石寺)

天の露落ちくるなべに現し世の野べに山べに
秋花咲けり

涅槃會をまかりて來れば雪つめる山の彼方は
夕焼のすも

小瀧まで行かむは未だくたびれの息つく坂よ
山鳩のこゑ

夕ひかる里つ川水夏くさにかくるる處まろき
山見ゆ

淡青たんじやうの遠とほのむら山たびごろもわが目によしと
寝てを見にけり

火の山を回めぐる秋雲の八百雲をゆらに吹きまく
天つ風かも (藏王山五首)

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れて
かがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清く
山高みかも

雲の中の藏王ざうおうの山は今もかもけだもの住まず
石あかき山

あめなるや月讀の山はだら牛うち臥すなして
目に入りいにけり

病癒えし君がにぎ面かほの髯あたり目にし浮びて
うれしくてならず (藏真氏病癒ゆ)

5 蟲

明治四十年作

✓花につく朱の小蜻蛉あきつゆふされば眠なみりけらしも
こほろぎが鳴く

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語かたり部べが
夜々つぎかたりけり

✓月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌み勒ろくは出でず
蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲なくと書かみに残りて
年ふりにけり

なが月の清きよひよひ蟋蟀やねもころころに
率ひ寝ねて鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず蟲の音も空に消入り
うらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てばつちの蟲音は細細と
悲しらに鳴く

なが月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに螻蛄けらも交り
てよき月夜かも

6 雲

明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の雲旗遠とほ
にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの
湧き卷きのぼる

藏王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも
湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲
誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる
五百つ白雲

遠ひこに吾戀ひ居れば久かたの天のたな雲に
鶴飛びにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の
背に雲ひそむ見ゆ

八重山の八谷かせ起りひさかたの天に白雲の
ゆらゆらと立つ

たくひれのかけのよろしき妹が名の豊旗雲と
誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺ヤの日は
入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたすまひ物ほしに
のりてつくづくと見つ

ひと國をはるかに遠き天ぐもの氷雲ヒのほとり
行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲戀ひしもろこしの君は
昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しろがねと笹べり赫く
渡津見の雲

7 苜 しほ

明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り苜しほに黄ばめる小
田を馬が來る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒
に入りけり

ふゆの日のうすらに照れば並み竹は寒ざむと
して霜しづくすも

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞
あらはれにけり

しもの夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が
奥に朱の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清搔すがきにしも引
くべかりけり

月あかきもみづる山に小猿ごも天つ領巾ひなど
欲ほりしてをらむ

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがた
をわが加へるなり

8 留守居

明治四十年作

まもりぬの縁の入り日に飛びきたり繩が手を
もむに笑ひけるかも

一人して留守居さみしら青光る蠅のあゆみを
おもひ無なに見し

留守をもちるわれの机にえ少女のえ少男の蠅が
ゑらぎ舞ふかも

秋の日の疊の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ
留守すも

入り日さすあかり障子はばら色にうすら匂ひ
て蠅一つどぶ

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす
羽さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉は行
きて何も来ぬかも

留守もりて入り日紅けれ紙ふくろ猫に冠せん
とおもほえなくに

9 新年の歌

明治四十一年作

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に
茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて
天新たなり

東海に礮馭盧生れていく繼ぎの眞日美はしく
天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて來ら
しも年の若子は

年ののはの眞日のうるはしくれなるを高きの上
り目蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現し
もろもろ

天明り年のきたるとくだかけの長鳴鳥がみな
鳴けるかも

しだり尾のかけの雄鳥が鳴く聲の野に遠音し
て年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守らへる大和島根に
春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと
年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して
見まくたぬしも

打目さす大城の森のこ緑のいや時じくに年ほ
ぐらしも

豊酒の屠蘇に吾ゑへば鬼子ども皆死ににけり
赤き青きも

くれなるの梅はよろしも新あたらたまの年の端に見
れば特によろしも

10 雑歌

明治四十一年作

あかどきの畑の土のうるほひに散れる桐の花
ふみて來にけり

青桐のしみの廣葉の葉かげよりゆふべの色は
ひろごりにけり

ひむがしのももしび二つこの宵も相寄らなく
てふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春はさり山焼くる
かも天の足り夜を

ひさ方の天の赤瓊のほひなし遙けきかもよ
山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の疊に
蟻を見しかな

眞夏日の雲の峯天のひと方に夕退きにつつか
がやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中
の寂しさ思ふ

秋の夜を灯ともしづかに揺るる時しみじみわれは
耳かきにけり

ほそほそと蟲啼きたれば壁にもたれ膝に手を
組む秋のよるかも

旅ゆくど井いに下り立ちて冷ひや々に口そそぐべの
月見ぐさのはな

11 鹽原行

明治四十一年作

晴れ透とほるあめ路ぢの果てに赤城根あかぎねの秋の色はも
更け渡りけり

小筑波せきつばを朝を見しかば白雲の凝れるかかむり
動くともせず

關屋いでて坂路になればちらりほらり染めたる木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて尾を振るが見ゆ

山角にかへり見すれば歩み來し街道筋は細りてはるけし

馬車とごろ角を吹き吹き鹽はらのもみづる山に分け入りにけり

山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼り來わがまなかひに

とうとうと喇叭を吹けば鹽はらの深染の山に馬車入りにけり

つぬさはふ岩間を垂るるいは水のさむざむと
して土わけ行くも

湯のやごのよるのねむりはもみぢ葉の夢など
見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水に
おもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音の近くに
止みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿の女めが起きねとい
へど起きがてぬかも

世のしほと言のたふとき名に負へる鹽はらの
山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに
山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染みし紅葉を
踏みつつぞ行く

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに
水たぎち見ゆ

かへりみる谷の紅葉の明らけく天に響かふ山
がはの鳴り

現し我が戀心なす水の鳴りもみちの中に籠り
て鳴るも

山川のたぎちのごよみ耳底にかそけくなりて
峯を越えつも

ふみて入るもみちが奥は横はる朽ち木の下を
水ゆく音す

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり
音とどろくも

うつそみは常なけれども山川に映ゆる紅葉を
うれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親しみて鳴
く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木の黄にもみち明るき峽に
道入りにけり

もみち原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこのさみしみに
堪へて鳴くなり

つかれより美しくしいめに入る如き思ひぞ吾が
する蟋蟀のこゑ

もみち照りあかるき中に我が心空しくなりて
しまし居りけり

しほ原の湯の出でごころとめ來ればもみちの
赤き處なりけり

山の湯のみなもごころ鐵色かねいろにさびさびにけ
り草もおひなく

鐵かねさびし湯の源のさ流れに蟹が幾つも死にて
ゐたりも

親馬にあまえつつ來る子馬にし心動きて過ぎ
がてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠くれなるに
夕焼くる見ゆ

橋のべのちひさかへりて楓かへり路になかくれなると
染めて居りけり

天地のなしのまにまに寄り合へる貝の石あは
れとことばにして

ほり出すいはほのひまの貝の石ただ珍らしみ
ありがてぬかも

玉ゆらのうれしごころもとはの世へ消えなく
行かむはかなむ勿れ

おくやまの深き岩間ゆ海つもの石と成り出づ
君に戀ふるとき

もみぢ葉の過ぎしを思ひ繁き世に觸りつるな
べに悲しみにけり

山峽のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか
峽のもみぢに

もみぢ斑の山の真洞に雲おり來雲はをとめの
領巾漏らし來も

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りて
もみぢをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の國さび
月かたむきぬ

まぼろしにももの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に
月満てりけり

12 折に觸れて

明治四十二年作

潮沫しほなまのはかなくあらばもろ共にいづべの方に
ほろひてゆかむ

やうらくの珠はかなしと歎なげかひし女をんなのころ
うつらさびしも

宵よあさくひとり居りけりみづひかり蛙かはづひとつ
かいかいと鳴くも

をさな妻つまころに守り更けしづむ灯火ともしびの蟲を
殺してゐたり

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き
居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影も
さゆらぎて居り

春闌けし山峽の湯にしづ籠りたの芽食をしつつ
ひとを思はず

馬に乗り湯どころ來つつ白梅のここのふ春に
あひにけるかも

ひとり居て卵たまごうでつつたざる湯にうごく卵を
見つつうれしも

干柿を弟の子に呉れ居れば淡々と思ひいつる
ことあり

ゆふぐれのほごろ雪路をかうべ垂れ濕れたる
靴をはきて行くかも

世のなかの憂^{うれ}苦^くも知らぬ女^めわらはの泣^なくこと
はあり涙^{なみだ}ながして

春の風ほがらに吹^ふけばひさかたの天^{あま}の高^{たか}低^ひに
風^{かぜ}が浮^うべり

萱^{くわん}ざうの小^こさき萌^もを見てをれば胸^{むね}のあたりが
うれしくなりぬ

青山の町かげの田の畔^{はた}みちをそぞろに來^きつれ
春あさみかも

春あさき小田の朝道あかあか金^{かね}氣^け浮^うく水^{みづ}に
かぎろひのたつ

明けがたに近^{ちか}き夜^よさまのおのづから我^{われ}心^{こころ}にし
觸^ふるらく思^{おも}ほゆ

天竺のほとけの世より子らが笑にくからなく
て君も笑むかな

さみだれはきのふより降り行々子をほのぼの
やさしく聞く今宵かも

八百會のうしほ遠鳴るひむがしのわたつ天明
雲くだるなり

13 細り身

明治四十二年作

重かりし熱の病のかくのごと癒えにけるかと
かひな撫るも

蛸のかなかなかなと鳴きゆけば吾のこころの
ほそりたりけれ

あな甘、粥強飯を食すなべに細りし息の太り
ゆくかも

まことわれ癒えぬともへば群ぎものこころの
奥がに悲しみ湧くも

やまひ去り嬉しみ居ればほのぼのに心ぐけく
もなりて来るかも

たまたまの現しき時はわが命生きたかりしか
このうつし世に

病みぬればほのぼのとしてあり經たる和世の
すがた悲しみにけり

いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶとも
ひと云ふらむか

しまし間も今の悶えの酒狂さかになるを得ばかも
嬉しかるべし

閉づる目ゆ熱き涙のはふり落ちはふり落ちつ
つあきらめ兼ねつ

やみ恍惚まぼろしおそろへにたれさ庭べに夕雨ふれば
嬉しくきこゆ

みちのくに我稚くて熱を病みしその日仄かに
あらはれにけり

おそろへし胸に眞手まておく若き子にあはれなる
かも蛸たこきこゆ

熱落ちておそろへ出で来もこのごろの日八ひや日
夜八や夜は現しからなく

恣にやせ頬にのびし硬^こひげを手ぐさにしつつか
 さ夜ふけにけり

うそ寒くおぼえ目ざめし室^{むろ}の外^{そと}は月清く照り
 鶏^{けい}なくきこゆ

ぬば玉のふくる夜床に目ざむればをなご狂^{きやう}の
 歌ふがきこゆ

かうべ上げ見ればさ庭の椎の木の間おほき月
 入るよるは静かに

日を繼ぎて現身さぶれ蟬の聲も清^{すが}しくなりて
 人うつくしも

現身ははかなけれども現し身になるが嬉しく
 嬉しかりけり

おのが身し愛しければかほそ身をあはれがり
つゝ、飯食しにけり

火鉢べにほほ笑ひつつ花火する子供と居れば
われもうれしも

病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火を
して呉れにけり

わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしなご
いひ花火して居り

平凡に堪へがたき性の童幼ども花火に飽きて
みな去りにけり

なに故に花は散りぬる理法と人はいふとも悲
しくおもほゆ

とめどなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけ
なく蟋蟀鳴くも

宵淺き庭を歩めばあゆみ路のみざりひだりに
蟋蟀なくも

宵毎に土にうまれし蟋蟀のまだいとけなく啼
きて悲しも

さ庭べに何の蟲ぞも鉦うちて乞ひのむがごと
ほそほそと鳴くも

玉ゆらにほの觸れにけれ延^はふ鳶の別れて遠し
かなし子等はも

いつくしく瞬きひかる七星^{ななほし}の高天^{たかあま}の戸にちか
づきにけり

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを
蟲鳴きにけり

うらがれにしづむ花野の
際涯よりとほくゆく
らむ霜夜こほろぎ

よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子
らは死にて行くらむ

14分病室

明治四十二年作

この度は死ぬかも知れずと思ひし玉ゆら氷枕
の氷は解け居たりけり

隣室に人は死ぬごもひたぶるに帯ぐさの實食
ひたかりけり

熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ごと物を思へり

のび上り見れば霜しも月の月照りて一本いっほん松まつのあた
まのみ見ゆ

赤光 あかり

赤光目次

大正二年

1	悲報來(十首).....	三
2	屋上の石(八首).....	七
3	七月廿三日(五首).....	一〇
4	麥奴(十六首).....	三
5	みなづき嵐(十四首).....	八
6	死にたまふ母(五十九首).....	三三

7 おひろ(四十四首)……………四
 8 きさらぎの日(十一首)……………六〇
 9 口ぶえ(五首)……………六四
 10 神田の火事(五首)……………六六
 11 女學院門前(五首)……………六六
 12 吳竹の根岸の里(十一首)……………七〇
 13 さんげの心(十七首)……………七四
 14 墓前(二首)……………八〇

大正元年。 明治四十五年

1 雪ふる日(八首)……………八三

2 宮益坂(八首)……………八六
 3 折に觸れて(八首)……………八九
 4 青山鐵砲山(八首)……………九二
 5 ひさりの道(十四首)……………九五
 6 葬り火(二十首)……………一〇〇
 7 冬來(十四首)……………一〇七
 8 柿の村人へ(十首)……………一一二
 9 郊外の半日(十七首)……………一二六
 10 海邊にて(二十三首)……………一三三
 11 狂人守(八首)……………一四〇

12 土屋文明へ(八首)……………一三三

13 夏の夜空(八首)……………一三六

14 折折の歌(二十六首)……………一三九

15 さみだれ(八首)……………一四八

16 兩國(八首)……………一五一

17 犬の長鳴(八首)……………一五四

18 木こり(十七首)……………一五七

19 木の實(八首)……………一六三

20 陸岡山中(十一首)……………一六六

21 或る夜(八首)……………一七〇

明治四十四年

1 此の日頃(八首)……………一七五

2 おくに(十七首)……………一七八

3 うつし身(十七首)……………一八四

4 うめの雨(廿首)……………一九〇

5 藏王山(八首)……………一九七

6 秋の夜ころ(廿首)……………二〇〇

7 折に觸れて(廿首)……………二〇七

明治四十三年

1 田螺と彗星(十一首)……………二二七

2 南蠻男(十一首)……………三二
 3 たさな妻(十四首)……………三三
 4 悼堀内卓(七首)……………三〇

自明治三十八年至明治四十二年

1 折に觸れ(十七首)……………三五
 2 地獄極樂圖(十一首)……………三四
 3 螢(五首)……………三五
 4 折に觸れ(二十首)……………三四
 5 蟲(八首)……………三四
 6 雲(十四首)……………三七

7 苜しほ(八首)……………二六
 8 留守居(八首)……………二六
 9 新年の歌(十四首)……………二六
 10 雑歌(十一首)……………二七
 11 鹽原行(四十四首)……………二七
 12 折に觸れて(二十首)……………二九
 13 細り身(三十五首)……………二九
 14 分病室(五首)……………三一

挿 畫

蜜柑の收穫……………	木下 奎 太郎氏
彫 刻……………	伊 上 凡 骨氏
通草のはな……………	平 福 百 穂氏
三色版……………	田 中 製 版 所
佛 頭……………	木 下 奎 太 郎 氏

卷 末 に

○明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首を以て此一卷を編んだ。たまたま伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割番に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ様なひどい作迄も輯録して往年の記念にしようとした。特に近ごろの予の作が先生から褒められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雑誌に發表せず此歌集に收めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日の、この歌集編輯がやうやく大正二年度が終つたばかりの時に、突如として先生に死なれて仕舞つた。そ

れ以來氣が落つかず、清書するさへものうくなつて、後半の順序の統一しないのもその儘におくやうになつたのは其爲めである。はじめの心と今の心と何といふ相違であらう。それでもどうか歌集は出来上がった。悲しく予は此一巻を先生の靈前にささげばならぬ。

○平福百穂、木下李太郎の二氏が特に本書のために繪を賜はつた事を予は光榮に思つてゐる。そのうち李太郎氏の佛頭圖は明治四十三年十月三田文學に出た時分から密かに心に思つて居たものである。このたび予の心願かなつて到々予のものになつたのである。また、本書發行に就いて予を勵まし便利を與へられた長塚節、島木赤彦、中村憲吉、巖桐軒、古泉千樫の諸氏並びに信濃諸同人に對し、又「とうとうと喇叭を吹けば」の句を呉れた清水謙一郎氏に對し感謝の念をささげばならぬ。

○文法の誤の數ヶ所あること。送假名法の一定せざること。漢字使用法の曖昧な

ること等は、億劫な爲めにその儘にして置いた。本書の作物は今ごろ發行して讀んでもらふのには、工合の悪いのが多い。併し同じく讀んでもらふうへは自分に比較的親しいのを讀んでもらうと思つて、新しい方を先にした。はじめの方を一寸讀んで頂くといふ心持である。本書は予のはじめての歌集である。世の先輩諸氏からいろいろ教へて頂いてもつと勉強したい。

○本書の「赤光」といふ名は佛說阿彌陀經から採つたのである。彼の經典には「池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤光白光白光微妙香潔」といふところがある。予が未だ童子の時分に遊び仲間難法師が居て切りに御經を誦誦して居た。梅の實をひろふにも水を浴びるにも「しゃくしき、しゃくくわう、びやくしき、びやくくわう」と誦して居た。「しゃくくわう」とは「赤い光」の事であると知つたのは東京に来て、新刻訓點淨土三部妙典といふ赤い表紙の本を買つた時分であつて。あだかも露伴の「日輪すでに赤し」の句を發見して嬉しく思つ

たころであつた。それから繰つて見ると明治三十八年は子の廿四歳のときである。大正二年九月二十四日よりす。

『赤光』再版に際して

○多忙の身の上の故に「赤光」の歌も初版校正出来しみじみと繰讀せずに經た。「赤光」の初版發行は大正二年十月である。いま初版が賣切れて再版發行の運に到つたと聞くと、何となく嬉しい心が湧く。「赤光」の歌は私の敬愛する先輩諸氏からも遠國土に住むまだ知らない人々からも愛されて、さうして私は少し有名になつた。

○おもふに短歌のやうな體の抒情詩を大つびらにするといふことは、切腹面相を見せるやうなものであるかも知れない。むかしの侍は切腹して臍腑も見せて

ぬる。さうして西人は此ころを besondere Ehrgeiz などいふ語の内容に關聯せしめてもの言つてゐるが、「赤光」發行當時の私のこころは、少し色合が違つてゐた。大正元年九月の歌

銀 錢 光

とりいだす紙つゝみよりあらはるゝ銀貨のひかりかなしかりけれ
電燈をひくゝおろしてしろがれの錢かぞふればこほろぎが啼く
さ夜ふけと夜はふけぬらし銀の錢かぞふればその音ひゞきたるかな
わがまなこ當面に見たり塵をばこるがり行きし銀錢のひかり
しみじみと紙幣の面をながめたりわきて氣味わるきものにはあらず

などがある。當時雜誌アララギの會計係であつた私は、常にアララギの賣行を氣にしてゐた。その後アララギはだんだん發行を續けて倒れずにゐる。私の微かな歌集赤光がアララギとどういふ關係に立ちそれが如何に續いて來たかを念ふ

ときいろいろの追憶が湧いてくる。

○白面の友がきて、「赤光」は大正初年以後の短歌界に小さいながら一期を劃すやうに働掛けたと言放つ。私はその詞に對つてゐて苦笑もしない。ある夜、現歌壇の一部の Schematismus に對して「赤光」がいかに働掛けたかを思つたときいたく眉間を蹙めた。けれどもかかることは私の關するところではない。「赤光」は過去時に於ける私の悲しい命の捨どころであつた。

○歌づくりを現世出世の道とおもふな。そしてなほ歌をつくつてゐる。西國觀世音の札所を巡つて來た故里の老いたる父は「茂吉は歌などつくさうだな」と云つた。それから田植が忙しいからと云つて歸國した。いまは故里に梅の實黄に落ち、蠶は繭になり、その繭は絹糸になつて、藏王山の雪はだらに、それが消え、通草の實いよいよふくれて、大自然といへども刻々に變化してやむ時がない。「赤光」の再版に際して心に浮んだ斷片を書きつけ置く。大正四年七月一日

夜青山にて茂吉しるす。

『赤光』三版に際して

「赤光」が賣切れて第三版を發行するといふことを東雲堂主人が通知して來た。私は嬉しいと思つた。そこで久々で「赤光」の歌を讀んでみた。いかにも不満な歌が多いので今更かなしんでゐる。かつてはいふつもりで居つたのであつて、それが今は駄目である。私は自分で少しづつ直したいと思つたけれども、その暇がない、それゆゑに耻かしいけれども元の儘で第三版を發行し、私の歌を讀まれたかたがたに感謝してゐる。大正七年四月廿三日。長崎にて齋藤茂吉記。

大正二年十月十五日印刷
大正四年七月一日再版
大正七年五月二十三日版

正價金九十錢

著者 齋藤茂吉

東京市日本橋區檜物町九番地


發行者 西村寅次郎

東京市小石川區西江戸川町廿一番地

印刷者 土谷清平

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店

電話 本局 五六一四番



版權所有

